

## 日本の小学校英語について その2

上越英語教育学会 会長  
上越教育大学教授 北條礼子

みなさん、こんにちは。ここ 10 年ほど台湾を中心にアジア諸国の小学校英語の授業を参観してきましたが、やっと日本でも小学校英語が教科化になるのか、と教科化を待ち望んでいた私は感慨もひとしおです。

小学校英語もいよいよ新しい門出を迎えようとしています。平成 32 年度から第 3 学年及び第 4 学年において外国語活動が、第 5 学年及び第 6 学年において外国語科が実施されます。外国語活動においては、CEFR の基準を参考に「聞くこと」「話すこと [発表]」「話すこと [やり取り]」の 2 技能 3 領域が目標として提示され、外国語科においては、この 2 技能 3 領域に「読むこと」「書くこと」が加えられた 4 技能 5 領域が目標として提示されています。さらに、内容を見ると、音声として、中学校の言語材料のうち基本的なものが小学校に移動するとこととされ、文字及び符号については、活字体の大文字、小文字、ピリオド、コンマ、疑問符が導入されます。また、語、連語、慣用表現として 600~700 語、*get up, look at* などの活用頻度の高い基本的な連語、*Excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome* などの活用頻度の高い慣用表現が示されています。

今回の小学校英語の外国語活動と教科化において、文字が取り上げられたことが特に嬉しいです。私は本学の附属小学校においてゼミ生を中心とする院生、学部生が中学年からの文字指導に取り組む姿を見てきました。その中で中学年であってもたいていの子どもが文字に関心を示すことを見てきました。特に書くことに対して関心が強いのが印象的です。日本人は母語においても、平仮名を空書き、なぞり書き、写し書きなどを通して学ぶせいか、また漢字もそのような手立てで学ぶことがあるためか、小学生は中学年であってもアルファベットや英単語もとても書きたがります。確かに、英単語はアルファベットが読めたとしても、すぐに読むことはできません。英語は最も深い正書法であり、綴りと発音が異なっているため、簡単には読めるようにはなりません。アルファベットや簡単な英単語を書くことは考えてみれば子どもの負荷は高くはありませ

ん。出張授業では、アルファベットは空書き、なぞり書き、写し書きを通して子どもに教えてきました。書き順は本当は重要ではありませんが、漢字学習からの影響か、書き順を気にする子どももいるため、私たちは3年生で学習するローマ字の書き順を採用してきました。もちろん子どもには、他にも書き方はあるけれども、ここではこの書き方で書いていきましょう、と説明しています。

出張授業の文字学習の内容は、アルファベットの名前読み、音読み（フォニックス指導）とアルファベットの大文字、小文字を書くことを3年生から始め、その後4年生ではアルファベットの音読みや書き方を復習しながら、さらにフォニックスのマジック e、礼儀正しい母音、二重子音などを扱ってきました。読むだけでなく、書くことも扱ってきました。毎年10月から1月にかけて、30分のモジュールで全10回の文字学習プログラムを考案、実施してきましたが、研究ベースで行っているため、事前・事後テスト、事前・事後アンケートの実施があるため、実際には約8回の授業になります。30分に何もかも入れるのは不可能ですので、多くの場合、書くことが時間内に入りきらず、宿題ということになりました。授業を担当する学生チームはあれもこれも盛り込もうと理想が高くなり、結局3年生の初めての宿題はA3の大きさになってしまいました。子どもの反応が大変気になりましたが、驚いたことに、宿題を見ての子どもの反応は「楽勝、楽勝！」というものでした。私も含め、担当者がホッとしたことをよく覚えています。子どもが書きたがるというのが最も大きな理由ですが、その気持ちを大切にしてきました。とはいうものの文字指導は単純なものではなく、8回の授業が終了したときに全員の子どもが26文字のアルファベットの大文字・小文字を完璧に書けるようになるわけではありません。ただし、これまでに、一文字も小文字を書けなかった子どもでも8回の授業終了時には半分の13のアルファベットの小文字が書けるようになったこともありました。時間をもっとかけて取り組めば、ほぼ全員が書けるようになるものと思います。

何より、学外で英語を学習している子どもも多く、英語力格差が現在の小学校英語の大きな問題になっています。小学生は生活班を基にさまざまな活動をしていることが多いようですが、子どもの声を聴くと、「○○ちゃんは英語を塾で習ってるから、読めて書けるけど、私は行っていないからできない、、」という内容が多いように思います。これまでの外国語活動では、文字は補助的なものとして扱われ、公教育で文字指導がしっかりなされてこなかったことが、子どもの英語力格差を拡大してきたように思います。今回の教科化で文字指導が行われるようになったことは、子どもの現在の英語力格差の解消とまでは行かなくても、縮小化に役立つのではないのでしょうか。もちろん、中学校での英語科にもこれまで以上にスムーズに連携されていくことが期待できます。

ただし、今回の教科化に当たって、3単現のsが扱われないこと、代名詞のtheyが取り上げられないこと、動詞の過去形のうち規則動詞の-edの[id],[d][t]の音が聞き取りにくいので不規則動詞を取り上げ、扱う規則動詞としてはenjoyedがあげられているなどの点に、もどかしさを感じてしまいます。第二言語習得の分野でも3単現のsは日本人の習得が遅いとされていると聞いています。そうであれば、耳がいい小学生のうちから取り上げて、音としても何か違うことを感じさせるなど、早い時期から取り上げてもいいのではないのでしょうか。規則動詞の-edの音についても、大人より耳がいい小学生ですので、きっと聞き分けることは上手だと思います。10年ほど出張授業を通して、私が感じていることは小学生の英語学習における可能性の大きさです。もちろん、頭の中で考えているだけですが、英語をどこまで詰め込めるものか、とまで想像してしまい

ます。

最後に少し苦言を呈してしまいましたが、これからの小学校英語が地道に進んでいくことを期待しています。

会員の皆様の中にも、小学校英語に携わる方がいらっしゃると思いますが、皆様のご活躍をお祈りしております。



## 座しては始まらない

大学院 1年 言語系コース(英語)

杉本 美幸

大学院に入学して3ヵ月が経ちました。環境の違いに最初は戸惑いましたが、慣れてきた今、充実した毎日に大学院で学べることの喜びを実感しています。大学院に来て、今までの生活と変わったことの一つに、洋服選びがあります。とは言っても、毎朝念を入れたドレスアップをして登校するわけではありません。小学校に勤務していた頃は、動きやすさを考えてパンツスタイルばかり。めずらしくスカートをはいていると、必ず子どもから「先生、今日出張ですか。」と聞かれていました。大学院生となった今でも基本的には変わっていませんが、現場にいる頃より選択肢が広がり、それも小さな楽しみとなっています。しかし、私は洋服選びに時間をかけることは好きではありません。ぱっと決めて、ぱっと着替えることが好きです。でも、日によっては、ぱっと決まらないこともあり、朝から無駄に時間をかけてしまったことを悔やむこととなります。

ところで、みなさんはどうやってその日着ていく服を決めますか。頭に浮かんだ服にしますか。干してある洗濯物から選んできますか。クローゼットや箆笥を開けて、手に取りながら選びますか。私は、目覚めた時に布団の中で「今日は何を着ていこうかなあ」と考えることもありますが、これは大抵決まりません。考えているうちに二度寝するのが関の山です。私の場合は、箆笥を開けて、実際に何枚か手に取り、服を見て決めます。こんな些細な日常の中の一コマですが、ただ頭の中で考えているだけよりも、行動を起こした方が考えがまとまってくることを実感します。

これは、研究でも同じことが言えるのでは…、とある日考えました。自分はどんな研究課題を掲げ、どうやって研究を進めていくのか。漠然と考えて、どんどん不安ばかりを募らせていた時期もありました。でも、まずは行動を起こそうと思い直したのです。修了生の論文を読む、先行研究の論文を読む、先生や仲間から学んだり会話したりする中で情報を得る、本を読む、研究会等に出かけるなど。何かに向かうと、必ず新しい何かを得ることができます。理解が一步進むと、視野も広がります。とはいえ、動き始めたばかりで、まだまだ自分の研究への道筋がはっきりと見えているわけではありませんが、とにかく時間を大切に、行動を起こしながら、新しい知識を得て、自分の研究を確立していきたいと思います。洋服選びでは迷いたくない自分も、研究に関しては楽しみながら試行錯誤していきたいです。そして、貴重な2年間で得たものを現場で子どもたちへ返していきます。



# 回り道にしか見えない景色

大学院 1 年 言語系コース(英語)

伊藤謙志郎

「絶対に教師になる」

この気持ちを、私は中学生の頃から持ち始めています。当時の自分からしてみれば、正直、大学院に進学し、教育に関してより一層深く学ぶことになるとは思っていませんでした。また、周りの友人や知人が社会人として1人前になっている中、自分がまだ学生という身分であるということに引け目を感じ、まるで、教師になるという目的地まで回り道を辿って、ただ遠回りをしているような気分もしていました。

しかし、上越教育大学に入学し、上越教育大学の大学院生として生活をしていく中で、私のその考えに少しずつ変化が生まれてきました。上越教育大学の授業は内容が濃く、刺激的で、毎日新しい知識を得ることができています。また、周りの M1 の仲間達や、M2、M3 の先輩方の意欲的な姿勢から、毎日たくさんの刺激をもらっています。たくさんの刺激、そしてたくさんの新たな知識をもらい、毎日一回り成長した、新しい自分に出会うことができています。大学院に入学する前までは考えもしなかったようなことを考えたり、大学院に入学する前よりも明確な教師感を抱くことができるようになったりしています。このように、毎日、新しい自分に出会えることで、回り道をしている意義を感じ始めることができるようになりました。こんなにも素晴らしい環境に現在、自分の身を置けていることは本当に良かったと心から思っています。そして、この環境そのものに満足するのではなく、この環境を生かし、それを自分の成長へと繋げていかなければならないと、ある種、使命感のようなものを感じています。

確かに、時間的に見たら大学院に来て、学んでいることは回り道かもしれません。しかし、回り道にしか見えない景色はがあると確信しています。回り道にしか咲いていない、「新しい知識」という名の「花」、回り道でしか浴びることができない、仲間達や先輩からの「刺激」という名の「太陽」。そういったものに出会い、進み続けることで、普通の道で目的地にたどり着いた時よりも成長した姿で、目的地にたどり着くことができると思っています。ただし、この回り道の景色を楽しんでいるだけでは目的地にたどり着くことはできません。回り道にしか見えない景色を楽しみながら、自分自身も努力して歩を進め、「教師」という名の「目的地」にたどり着きたいと思っています。なので、これからもこの上越教育大学の大学院生として努力し、学び続け、素晴らしい教員になりたいと思います。

## *Where there is a will, there is a way.*

大学院 1 年 言語系コース(英語)

菊池文子

大学院に入学して3ヶ月が経ちました。私にとって縁もゆかりも無かったこの上越市に、だんだん愛着も湧いてきたところです。

私は学部時代、文学部に所属し、英語学を中心に学んでいました。学部時代は、教員を務めていた両親の影響から、幼い頃からなんとなく抱いていた「教師になるのかな」という、夢なのか想像なのかも分からない位の思いから、教員免許を取得するため、教職課程を履修しました。しかし、卒業後の進路を考え始める時期に差し掛かると、当時の私は、なんとなく描いていたビジョンに疑問を持ち始めました。「教師になった時に、自分は何ができるのか」という思いがふと浮かんできたのです。当時周囲が就職活動に向けた準備をする中、焦りから「本当に自分は教師になりたいのか」そんな疑問すら浮かびました。しかし、時間をかけて自分自身を見つめ直した結果、「やはり自分は教師になりたいのだ」と強く自覚し、同時に「人の人生に強く関わる仕事に就きたいのなら、責任を果たすための知識とそれを生かす実践力を身につけるべきだ」と考えるようになりました。そして教育についてしっかり学びたい、という思いに駆られ、大学院進学を志しました。

そんな志を抱きながらも、大学院に入学した当初は、日々の授業や会話ですら、私は緊張していました。同級生には現職の先生方もいて、ストレートの学生も学部時代に教育や英語について懸命に学んできた人ばかり。自分はこの中でどうやって生きていくのか、不安が募る日々でした。しかし、それが杞憂であることもすぐに分かりました。同級生はもちろん、先輩方も他者の意見にもものすごく関心を寄せてくれます。与えられた議題に対する知見が全くない人の意見も、「新たな視点」と捉え、一緒に考えるということがものすごく多いです。この環境に安心と喜びを感じると同時に、これが教員を目指す人間としてあるべき姿なのだ、と思うようになりました。生徒個人の人考えを尊重し、成長に繋げる、知識の詰め込みや考えの押し付けではなく、生徒自身が考えるためのアプローチをする、教育に携わる人間として、この姿勢を持つことの大切さにも気づくことが出来ました。

最後に私がこの大学院の魅力として最も強く感じている点をお伝えしたいと思います。それは、当たり前なのかもしれませんが、共に勉学に励む仲間全員が、教育に強い関心を寄せ、教師を目指している点です。“Where there is a will, there is a way.”「意志あるところに道はある。」これは学部時代に教育実習でお世話になった先生からもらった、ずっと私の心に残っている言葉です。しかし、実際に強い意志を持ち続けることは、人間なかなか難しいことです。同じ道を目指す仲間にも囲まれ、互いに刺激し合い、高め合うことで私の持つ意思は曲がることなく一層強くなるのを感じます。この大学院の環境のおかげで、私はよそ見することなく、目標に向かって勉学に励むことができているように思います。

教員になる、教員が持つべき力を考え身につける、これらの意志を持ち続け、将来の自分と、自分が関わっていく生徒たちの未来を豊かなものにするため、上越教育大学で過ごす2年間を実りあるものにしたいと考えています。

## 研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授  
中村洋一（平成4年度修了生）

### 連載第5回

#### はじめてのこと

「はじめてのこと」は、なぜかよく覚えている。

小学生の頃、はじめて買ったレコードは、いしだあゆみさんの『ブルーライト・ヨコハマ』で、400円だった。古いレコード盤の棚に置いてある45回転のEPレコードを見た息子が「とおちゃん、昔のCDは大きくて黒かったんだなあ」と言っていた。

同じ頃、はじめて映画館へ連れて行って貰い、植木等さんが絶好調だった『日本一の裏切り男』を観た。2本立てのもう一本は『港町ブルース』というちょっと子どもには見せたくないシーンもある映画で、一緒に行った大人たちが困っていたのを覚えている。

中学生になって剣道部に入り、全国大会出場チームの補欠になった。武道館の開会式で、入場行進の曲は『また逢う日まで』だった。前奏の「ちゃっちゃっ、ちゃらっちゃちゃ〜」の後に「じゃん」という音が入る。生で演奏していたブラス・バンドは、和太鼓をバットで叩いて「じゃん」というより、「どお〜んっ」という音を出していて、ちょうどその時にその太鼓の横を通った。はじめて買ったLPレコードは尾崎紀世彦さんのファースト・アルバムだった。

洋楽は高校生になってからだった。後になってH<sub>2</sub>Oというフォーク・デュオで『思い出がいっぱい』をヒットさせた赤塩君が同じクラスにいて、もっぱらビートルズを薦めてくれたけれど、自分はサイモンとガーファンクルだった。Boxerという曲が好きだ。今また、“Now the years are rolling by me, they are rocking evenly. I am older than I once was, but younger than I'll be. That's not unusual. No, it isn't strange, after changes upon changes, we are more or less the same ...”と唄うSimon & Garfunkelを聞いて、深く頷いたりしている。はじめて買った洋楽のLPは、赤いボックスに入った2枚組GIFT PACK SERIESのサイモンとガーファンクルだった。

大学に入って、ひと夏のアルバイト代を全部つぎ込んで買った初めてのギターは、丸穴のフォーク・ギターではなくて、f ホールのアーチド・トップで、茶木というメーカーのものだった。40年以上も弾いてきたギターは研究室に置いてあり、今でも時々 English Pop Culture という授業の予習で弾いたりしている。

高校の教員になった時に姉が結婚して、お下がりの軽自動車ももらった。はじめて乗った自分の車は、水中メガネというあだ名で、オレンジ色の Honda Z だった。その車を下取りに出して、はじめて自分で買った中古車は、Isuzu の Gemini だった。カセット・プレイヤーが付いているのが嬉しくて、通勤の間にアルクの English Journal についてきた英語のインタビューをよくかけていた。

はじめて担任したクラスの連中が卒業して、はじめて同級会を開いてくれたのは、まだ暑い 9 月の中頃だった。もう担任よりも老けた顔をした教え子もいて、誰かが「ビールもう一杯、先生のところへお願いします」と頼んだら、その老け顔の教え子に運ばれたりして、みんなで大笑いした。教師にとって教え子の同級会



ってこんなに嬉しいもんかあ、とはじめて分かった。「実は今、おっかあが入院していて、もうじきうまれるかも」と話したら、女の子達が怒り出して、「こんなところで呑んでいないで、早く病院へ行って付き添いなさいっ」と言われて、居酒屋を追い出された。病院のローカにあったベンチでウトウトしていたら、「うまれたようですよ」と義理の母に起こされて、元気な泣き声が聞こえてきた。はじめての我が子は、特大サイズの目をした女の子で「とおちゃん、こんなたいせつなひに、おさげなんかのんでえ、まったく...」と言いたげな顔をしていた。

はじめて「英語」を意識したのは、アポロ 11 号が月面に着陸した時の衛星中継だった。アジアで、そして有色人種の国ではじめて開かれた 1964 年の東京オリンピックの時にはじめて我が家にやって来た白黒テレビに、静の海と NASA の間の交信が音声と画像で伝えられ、宇宙飛行士のアームストロングさんが、有名な “That’s one small step for [a] man, one giant leap for mankind.” と言った映像をリアルタイムで見っていた。YouTube に当時の映像が残っていて ([https://www.youtube.com/watch?v=\\_BpUtoc5zVA](https://www.youtube.com/watch?v=_BpUtoc5zVA), 5 分 29 秒から)、その部分を聞くと、「人類の非常に小さな第一歩です」と前半の部分が日本語に通訳され、その日本語が後半の英語の音にかぶっている。アームストロングさん自身も man の前に [a] を入れたかどうか記憶が曖昧だったらしく、後になって、a があるかないかで、感動的な言葉もナンセンスになってしまうという論争があったことを知った。その後、録音の音声解析などで、かすかに [a] が入っているのではないかという結論を得て、自分の人生にとって大きな意味を持った「一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては大きな飛躍である」という言葉が間違っていないことが確認されたようで、ちょっと安心した。西山千さんという同時通訳の方の硬い日本語を聞いていて、まだ小学生だったけれど、なんだか、自分は英語の勉強をするのではないか、というかすかな予感があった。

中学に入ってはじめて英語の担当になった先生は、とても長身でかっこよかった。エイゴの香



りがにじみ出てくるような先生だった。当然、その先生が好きになり、エイゴが好きになった。高校1年の時の担任の先生も、若くて知的な英語の先生だった。チョークの音がカツカツカツと響くような、静かで真面目な授業をされる先生だったけれど、クラス替えを前にした最後のホームルームの時、茶話会のようなことをやり、みんなで歌を唄ったり、ゲームをした後、先生が、「今日は最後のホームルームなので、ボクが英語の歌を唄います」とおっしゃって、なぜか裸足になり、掃除用具のロッカーから箒を持ってきてギターの代わりにして、*You are my sunshine* を唄って下さった。決してお上手とは言えなかったけれど、心にじーんと滲みて、今でもはっきり覚えている。その先生は今、我が市の教育長となり、自分も教育委員として、一緒に仕事をさせていただいている。

英語の教師になろうと思った動機は、「一生懸命英語を勉強してきたつもりだけど、英語ができない、しゃべれない。これは教え方が悪かったからに違いない。教え方の勉強をして、自分の英語をもうちょっと何かしたい」という、ある意味不純で、責任転嫁のかたまりのようなものだった。その勉強の中で、英語のテストをご専門とされる先生と出会った。1970年代後半の英語教育研究では、測定と評価の分野は、まだまだ少数派だった。ゼミのテキストは、出版されたばかりの Valette, R. M. (1977). *Modern Language Testing*. で、‘test battery’ という用語が出てきて、どうして英語のテストと電池が関係するのかよくわからなかった。「テスト一式」を意味するのだと習い、ああ、そういうことかあ、プラスとマイナスの一式、ピッチャーとキャッチャーの一式と同じだったのかあと納得し、はじめて core meaning に結びつきそうなことを考えるきっかけとなった。

今から数年前、Korean English Language Testing Association の学会で発表することになり、はじめて韓国に行くことになった。その発表のイントロで使おうかと思って、言語テストの歴史を調べていたら、Shibboleth test のことが書いてあった。

“... the first political modern language test was the Shibboleth test as recorded in the Bible. This test was a single-item, objective, oral, phonological test, individually administered and the 42,000 who failed it were slaughtered on the spot.” The pass or fail criterion was the /f/ sound.” (Kunnan, 1999, *Concise encyclopedia of educational linguistics*, p. 707; Spolsky, 1995, *Measured Words*, p. 15)

はじめての言語テストは、「合い言葉は? 山っ!」「川っ!」のような、敵味方を見分ける発音のテストだったらしい。そういえば、昔見た『大脱走』という映画の中で、ドイツ語をうまく使って逃げていたイギリス人捕虜が、最後の検問で、ゲシュタポに英語で「ドイツ語上手ですね」と褒められて、つつい英語で Thank you. と応えて捕まってしまう場面があった。しかも、捕まってしまった本人は、脱走の練習でドイツ語の先生をやっていて「罨にはまるな、英語で話しかけられても英語で返したらダメだ」と教えていた。いざという時でさえ、言葉とアイデンティティを切り離すのは難しいものだなあ、などと思う。

さて、英語教育である。2017年3月に、ここ数年来議論されてきたいくつかのアイデアが、はじめて公にされ、新学習指導要領案として公表された。「社会に開かれた教育課程」を重視する

と記された前文が新設された。小学校での外国語(英語)の教科化やプログラミング教育の必修化が盛り込まれた。かねてから話題となっていた「アクティブ・ラーニング」という文言は使用されなかったが「主体的・対話的で深い学び」の実現が謳われた。そして、各学校が組み立て、家庭・地域と連携・協同しながら実施する「カリキュラム・マネジメント」が求められた。指導要領というと、従来は「教育内容」に重点が置かれたが、今回の案は、「教育方法」に大きく踏み込んだもので、このような傾向ははじめてのものではないか、という人もいた。『「主体的・対話的で深い学び」をすることができる能力』を教育するとすれば、それは、もちろん教育方法に関わるものでもあるが、それ自体が教育内容であり、教育目標のひとつとなるべきものなのだろうか。だとすると、その能力の下位構成要素は何なのか検討しなければならないだろう。一過性の取り組みとも思える Can-Do はどこへ行ってしまったか、『「主体的・対話的で深い学び」をすることができる能力』の Can-Do リストを作る必要があるのではないかと、'common' framework のはずが、また「各学校が」でいいのか、グローバル人材(人財)育成の教育方法に関する検討は充分だったのか、「スーパー・グローバル」なんていうネーミングをすることがそもそも global じゃないんじゃないかといった危惧の声を聞くことも少なくない。ちょっと前までは、小学校英語教育での文字使用は御法度だったけれど、今度は、アルファベットの指導が入るという。なんだかどうも、一方的で、上意下達で押し切る印象が強い。それなのに、はじめての取り組みへの対処法に関する情報は限定的で、現場への「丸投げ」感が強く、正直、大丈夫なのかと思う。しかし、英語教育の現場は、忖度(良い意味ですよ、ここでは ...)しながら、毎日の実践を進めていかななくてはならない。

大学入試のシステムも大きく変えることが検討されている。「教科横断型」という考え方も、日本の大学入試に関わるテストでは、はじめての概念じゃないだろうか、数十万人の受験者が書く、記述式解答の評価における信頼性の課題を解決し、実現可能性が担保されるのだろうか、英語の外部テストの利用は、そこからの逃避ではないだろうか、構成概念の異なる複数のテストによる結果を、どのように共通の尺度に乗せるのだろうか。もし、大量の受験者データから相関関係のようなものを求めて、複数のテスト結果を比較するといった程度の検討であるとするならば、それは不十分で、不確実かつ不正確なのではないだろうか。相関関係を進めていくのだったら、言語知識と言語運用能力との関係解明の研究は、妥当性検討の研究の中で取り組まれてきているし、不十分であれば、今から詳細な検討を始めてもいい。そもそもテストは、一部の言語能力のサンプリングから、全体の言語能力を推測するものであるのだから、4 技能のテストのメリット・デメリットをよく検討すれば、少なくとも、多くの受験生が取り組む高等学校基礎学力テスト(仮称)のようなものは、客観形式のテストの方が、かえって正確で信頼性が高く、現実的なのではないだろうか ... はじめて取り組み、解決していかなければならない課題が山積している。少なくとも、新しい大学入試システムが現場の取り組みをゆがめるようなことになってはいけないと思う。

上越教育大学の修了式の時、それまでは、2 着買うと 1 着おまけに付いてくるようなスーツばかりだったのだけれど、頑張った自分にご褒美のつもりで、はじめて東急百貨店で **Brooks Brothers** のスーツを奮発した。25 年近くも着続けて、今ではもう、テカテカになってしまった。この春から学科長にもなったし、公式の行事に出ることもあるかも知れないと考え、今年、同じ型番のスーツをまた買った。多分、これが、現役時代に購入する最後のスーツになるのかもしれない。

## 編集後記

北條先生の巻頭記事において、英語の文字指導について触れられていますが、子どもたちはこちらが考える以上に知的吸収力、好奇心があり、小学生でもアルファベットを書くことに楽しみを見出してくれるのではないかと思います。私は大学の授業で板書をする際、筆記体で書きたくなるのを我慢してブロック体と筆記体の中間のような板書をしています。非常にフラストレーションがたまります。「筆記体を書かれると読めない。」という学生が少なくないため、こちらは筆記体にはこだわらないようにしていますが、本当は筆記体で板書しても理解してほしいなと思っています。

中学校教育で筆記体が教えられなくなってから久しいわけですが、英語教師でも筆記体を苦手とする方が存在をすることを知り驚くことができました。某県の公立中学生 T 君は英語の先生に「筆記体を書いたら高校入試ではバツにされます」などと言われ、不愉快だったそうです。また、彼が通っている塾で英語のテストを受験した際、テスト後、一人だけ残されて、別の答案用紙にすべてブロック体で書き直させられたと不満を述べていました。しかし、宿題や小テストなどでは筆記体で書いておくと間違っているのに○をつけてくれるから楽だと言っています。筆記体で書いておくと、英語の先生は細かくチェックしないのだそうです。その一方で、クラスメートの中には筆記体に魅力を感じて、ノートに自分の名前を筆記体で書いてほしいと頼んでくる子がいたり、自分も筆記体を書きたいと独学で覚えてきた子もいるそうです。以上は、私が知る中学生の少年から聞いた話です。

授業で筆記体を教えろとまでは申しませんが、生徒が筆記体を書いた時、ぜひ、褒めてあげてください。そんな小さな積み重ねが英語学習全体につながるような気がするのです。

(編集委員 H.I.)

---

2017年7月22日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）

---